

第1回 地域福祉計画専門分科会 発言の要点(事務局作成)

	氏名(敬称略)	要点1	要点2	要点3
1	イトウ ユキコ 伊藤 由紀子	常に人がいて、集まりやすい居場所があると人が集まる	住民主体も大事だが、外部の人間が運営する効果(運営の助け、相談しやすい環境)	継続にはネットワークと住民同士の助け合いも重要
2	カメイ チセシ 亀井 智泉	疾病や医療情報への理解促進	福祉と医療の連携(福祉へ医療が入る)	アウトリーチの重要性(相談される前に言語化)
3	コイケ クニコ 小池 邦子	障がい者の就労の場として地域の仕事とマッチング	地域の中で活動することで理解も進む	高齢者(認知症)と障がい者とのかかわりも居場所づくりとして実施
4	サトウ モモコ 佐藤 もも子	コロナ禍で見えない貧困の顕在化	居場所として多様な就労の場や、社会とのつながりの場	人への投資、医療など他分野との連携が必要
5	サワヤナギ ヤチエ 澤柳 八千江	ひきこもり支援窓口を通じた重層的支援体制の整備	行政内でも伴走的な支援が必要	ケアが必要なために社会に出られない方の居場所
6	トダ チトミ 戸田 千登美	高齢者(シニア)の居場所、つながりづくりへの関心が高まっている	主体的な活動はコロナ禍においても継続しているため、主体的な活動が生まれるアプローチが必要	世代間の価値観を知ることが生きづらさの解消につながる
7	ナガノ ミツアキ 永野 光昭	山間部で人口減少もあり、地域社会をつくるリーダーが少なくなっている	介護予防等、福祉事業の見える化ができればよい。	デジタル化に関する対応が必要
8	ナガミネ ナツキ 長峰 夏樹	福祉以外の多様な分野との協働、発信	地域の現状に応じた福祉の在り方を考えることも必要	既存の福祉サービス以外の取組(医療的ケア児支援ボランティア、食料支援ボランティア)
9	ホリタ ナオキ 堀田 直揮	集まりやすい居場所(サードプレイス)、多世代が交流する(できる)居場所	問題が起こっても対応できる住民の力を引き出していくことが必要	福祉の観点を地域活性化に活かす
10	ヨコヤマ クミ 横山 久美	氷河期世代など支援が多様化する中、支援機関の連携が必要	人のスキルが継続できるような工夫が必要	マンパワー不足で無くなる団体もあり、団体の継続性が課題